

コロナ禍におけるオンライン授業,
研究に関する大学院生の意識調査結果

慶應義塾大学大学院文学研究科 FD 委員会

2021 年 4 月 30 日

慶應義塾大学大学院文学研究科は、コロナ感染症拡大予防のために2020年度の春学期の授業は全面オンラインとし、三田メディアセンターなど学内施設は立ち入り禁止となった。その後、メディアセンターは資料の郵送貸出、予約制による少人数の入場を行うようになり、秋学期からは約3割の授業は対面となった。このような状況で、大学院生の授業および学位論文作成に向けた研究にどのような支障が出たのかについて大学院生の意見をひろくたずねるとともに、オンライン授業という新しい形態が今後の大学院の教育にいかすことができないのか探るために、2020年度の授業が修了した2021年1月20日から2月25日の期間で、文学研究科の修士課程、博士課程に所属する大学院生に対してGoogleフォームによる質問紙調査を実施した。本報告書ではその結果をまとめた。休学しているとの記述が2名からあったが、授業以外の回答がなされていたため集計に含めている。回答結果の公開に関しては調査時点で同意を得ているが、回答の中で自由記述部分の公開をやめてほしいという意見があった回答者の回答は削除してある。

1 回答者の学年と回答率

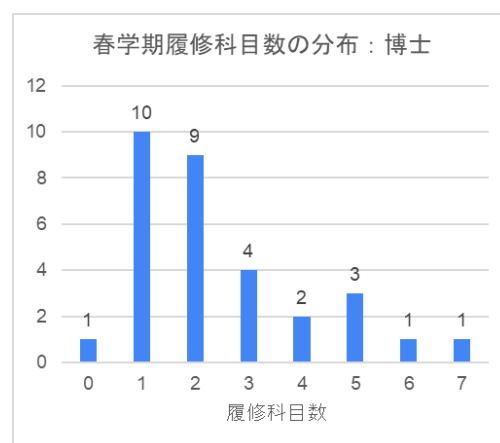
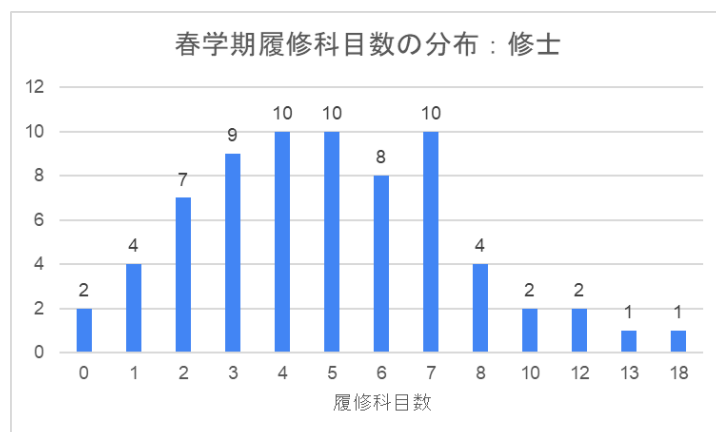
回答数は全体で105件、修士課程の院生のおよそ半分、博士課程の3割強からの回答があった。2020年度に入学した修士1年の回答率が最も高かった。

	回答数	在籍者数	回答率
修士1年	33	62	53.2%
修士2年	39	80	48.8%
博士1年	7	19	36.8%
博士2年	8	23	34.8%
博士3年	16	50	32.0%
無回答	2		
	105	234	44.9%

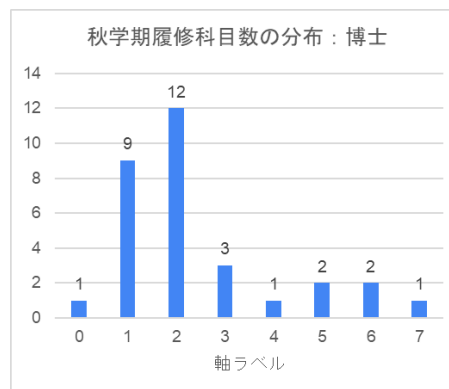
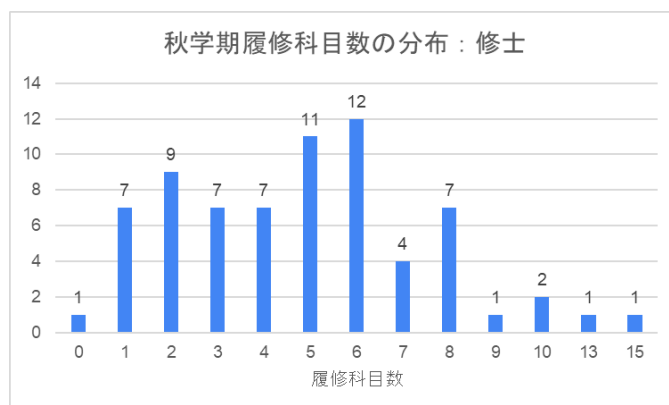
【授業にかんすること】

2 履修授業数

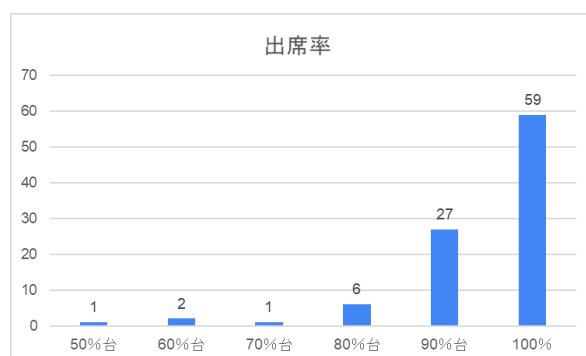
春学期の履修科目数は0～18科目で、修士課程では4～7科目履修者がほぼ半数、7科目以下で83.3%となっている。博士課程は1科目か2科目の履修で約6割となっている。



秋学期の履修科目数は0～15科目、修士では5科目か6科目履修している院生が多く、6科目以下の履修者が75%を占めている。博士課程は春学期と同じく1科目か2科目の履修が多く、67%を占めている。



授業の出席率は、100%との回答が59件61.4%、90%以上との回答が86件89.5%となっている。



3 履修した授業の形態

春学期の授業はオンラインリアルタイム（双方向）、オンデマンド、併用のいずれであったかを回答してもらったところ、オンラインリアルの授業が100%と回答した院生の割合が一番高く43%、50%台と60%台がそれぞれ18%であった。他方、春学期オンデマンドの授業は0%だった院生は約半分で、最も高かった。50%以上がオンデマンド授業だったという院生は12人、10%強であった。

春学期オンラインリアル授業割合別院生数と割合

	人数	割合
0%	4	4%
10%台	2	2%
20%台	1	1%
30%台	3	3%
40%台	2	2%
50%台	16	18%
60%台	16	18%
70%台	2	2%
80%台	6	7%
90%台	0	0%
100%	39	43%
	91	100%

春学期オンデマンド授業割合別学生数と割合

	人数	割合
0%	50	55%
10%台	6	7%
20%台	10	11%
30%台	8	9%
40%台	5	5%
50%台	7	8%
60%台	2	2%
70%台	1	1%
80%台	0	0%
90%台	0	0%
100%	2	2%
	91	100%

秋学期に関しては、授業形態を対面中心、オンラインリアル中心、オンデマンド中心、対面とリアル半々、リアルとオンデマンド半々、その他から選んでもらった。中心となったのは秋学期もオンラインリアル中心の授業で、すべてオンラインリアルだったという院生が31%、50%以上がオンラインリアルだった院生は64%となった。対面授業がなかった院生が56%と6割近くで、対面授業が50%以上だった院生は22%にとどまっている。

秋学期オンラインリアル授業
割合別学生数と割合

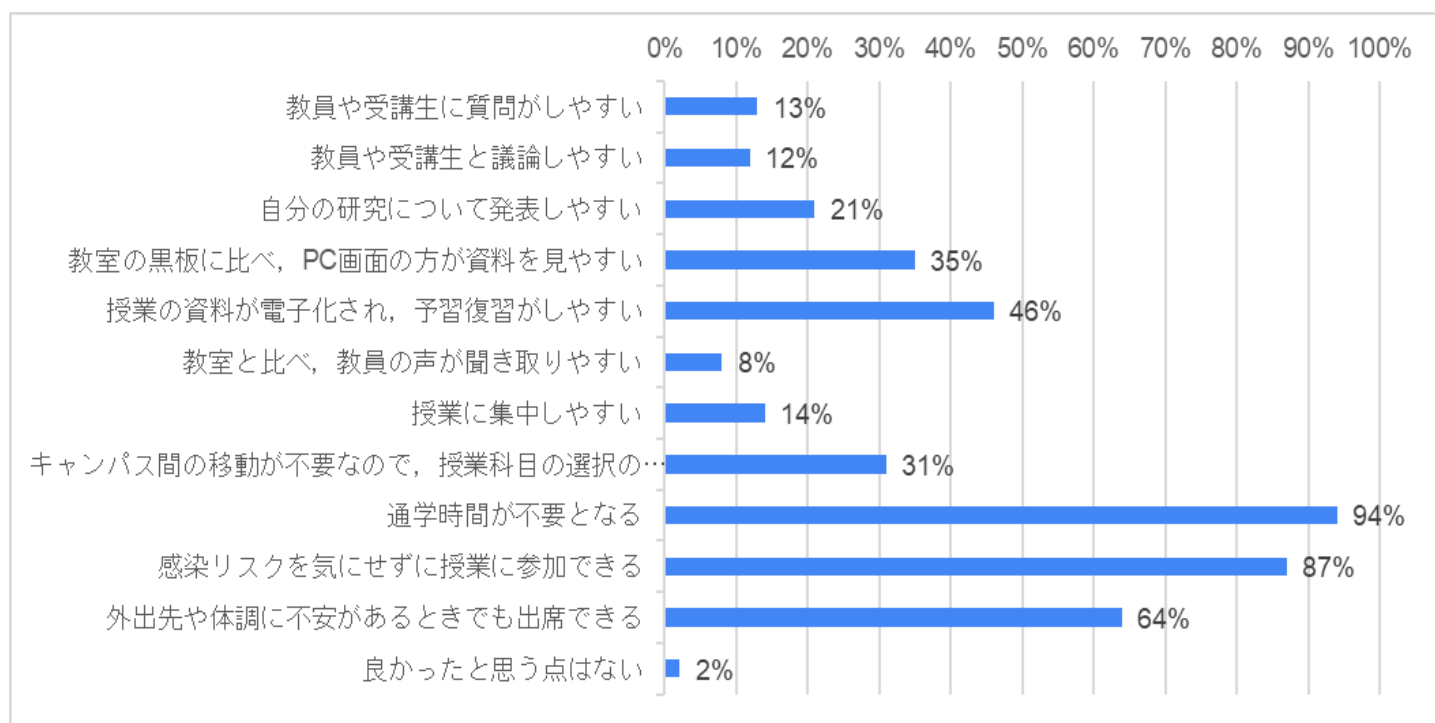
	人数	割合
0%	18	20%
10%台	4	4%
20%台	4	4%
30%台	6	7%
40%台	2	2%
50%台	11	12%
60%台	10	11%
70%台	1	1%
80%台	7	8%
90%台	0	0%
100%	28	31%
	91	100%

秋学期オンデマンド授業
割合別学生数と割合

	人数	割合
0%	51	56%
10%台	5	5%
20%台	7	8%
30%台	6	7%
40%台	1	1%
50%台	10	11%
60%台	4	4%
70%台	0	0%
80%台	2	2%
90%台	0	0%
100%	5	5%
	91	100%

4 オンライン授業のよかったと思う点 (N=100)

オンライン授業でよかった点として、通学時間が不要になることと感染リスクを気にせず授業に参加できることが9割前後と高い割合を示した。



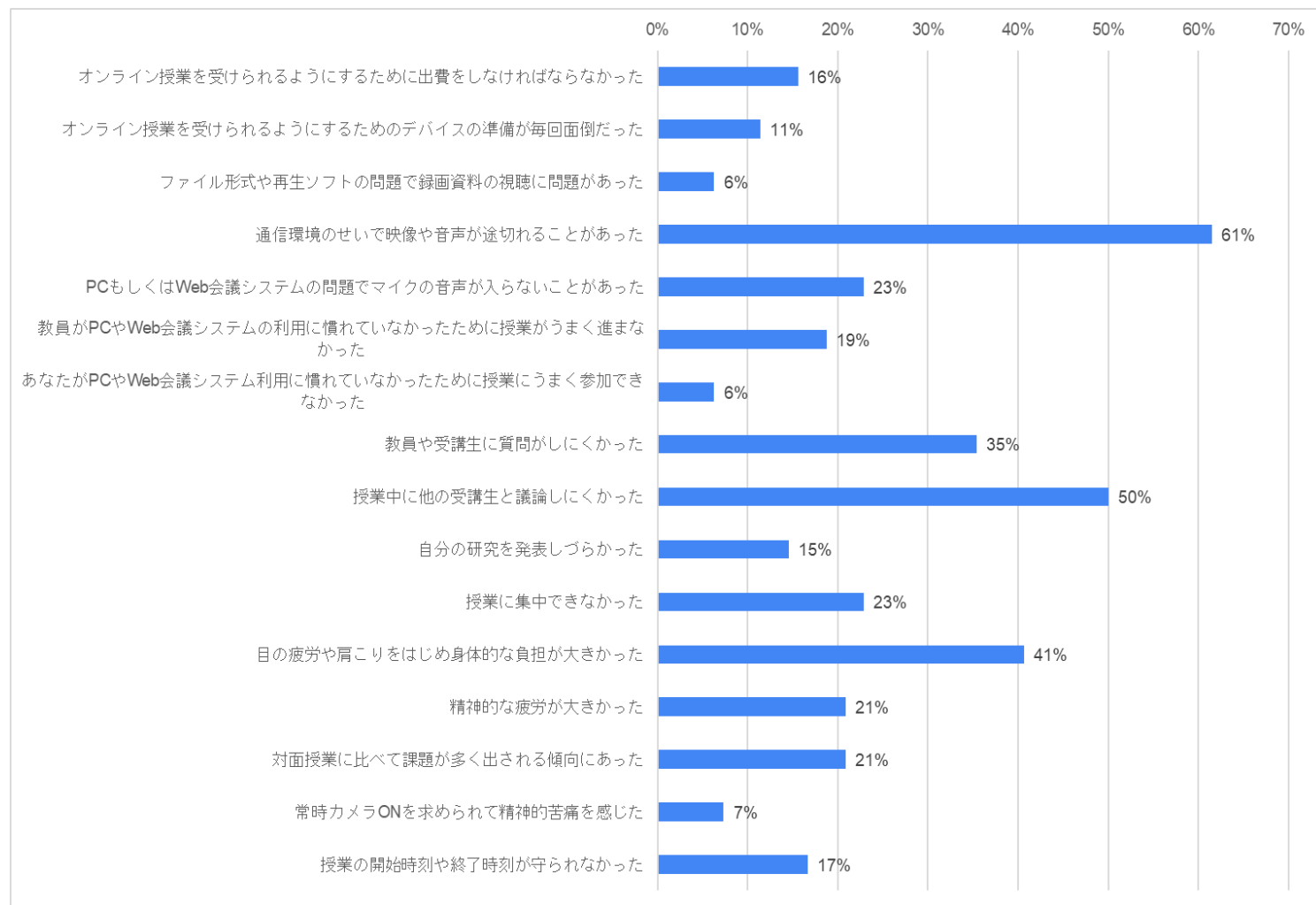
注：上記で文字が切れている項目は「キャンパス間の移動が不要なので、授業科目の選択の幅が広がる」である。

〔自由記述 16 件〕 オンライン授業への意見でないものは削除した。

- ・顔出しやミュートをその場に応じて使い分けられる。
- ・対面よりオンラインのほうが良いと感じました。
- ・指導教授と修士論文についての相談がいつでもできるので良かった。
- ・対面授業のほうが、雑談も含め教員・受講生とディスカッションが進んだ。しかし、オンライン授業でも、教員のかたの工夫で、複数のコメンテーターが登壇くださり、大変貴重で有意義な授業があり、学ぶ点が多い秋学期だった。
- ・ギリギリまで予習できる。資料印刷代がかからない。
- ・とにかく感染リスクを回避できること。
- ・帰省しながら授業を受けられることが良かった。
- ・もともと自宅でオンライン環境が整っていたことと、ゼミナール形式がほとんどであるため、講読や研究発表などに障りがあると感じたことはありません。ただ一点だけ挙げるならば、ウェブカメラを使用していない参加者の表情は（当たり前ですが）見るできないため、発言したことを理解してもらえていそうかどうか分かりづらいという問題はあると思います。
- ・博士課程の学生は、オンラインでも支障が無いが、学士課程の学生は対面式を希望することが多いように見受けられた。
- ・通学費（定期代）が浮く。
- ・地方の実家から授業に参加できるため、家事の時間が減って研究の時間が増えたり、生活費が節約できたりする。
- ・通学時間が不要だったこと、オンデマンド形式だったことから、就職活動と講義や研究活動を両立しやすかった。
- ・研究に関してはあまり変わりありません。今まで仕事で忙しく取れなかった矢上の情報工・学科の講義を受講できたのが非常に助かりました。
- ・通学が不要なため選択できた科目があった。
- ・講読授業では翻訳作業の進捗率が良かった。（対面より話をし難いため）
- ・教員・学生問わずその場で提示したい資料を共有できる。

5 オンライン授業（リアルタイム、オンデマンド）で問題と思った点(n=96)

オンライン授業で問題と思った点に関しては、通信環境の問題が 61%、授業中に他の受講生と議論しにくかったが 50%、目の疲労など身体的負担が 41%と、上位 3 位を占めた。これら 3 項目はそれぞれ問題とされる種別が異なるものであった。全体として、特定の項目に意見が集中するのではなく、多数の項目について意見が分散されているように見える。



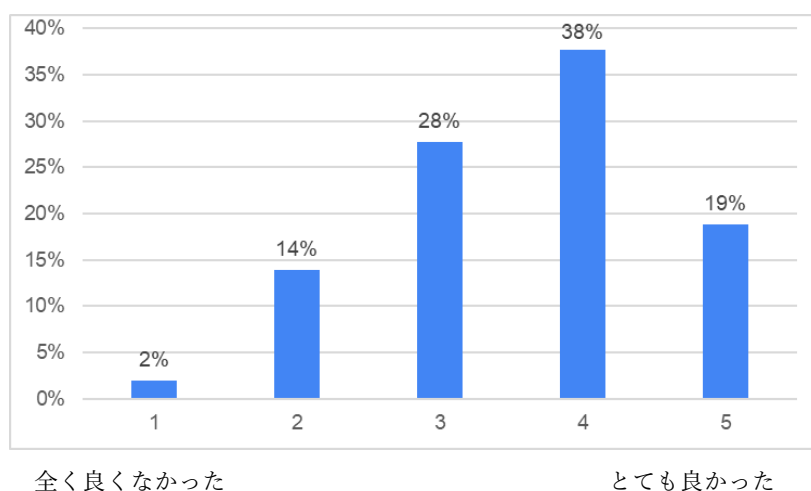
〔自由記述〕 問題点の指摘が 23 件、問題なしとするものが 1 件あった。

- ・ソフトは時としてダウンしてしまうので、授業中に数分のブランクが発生してしまう。
（キャンパスでの教室では次の授業が始まるが、オンラインではそれが無いので）授業終了時刻が守られない。
- ・PC が古いため仮想背景が使用できないことから、カメラオンの際には常に生活空間である自室内を映さなければならず、それに若干の抵抗を感じた。
- ・PC の問題で、カメラが機能しないことがあった。
- ・ホワイトボードが実質使えないので、構造的図式的な議論はしにくかった。
- ・オンラインの場合、教員の側からの説明が少なくなり、学生側の報告や、それに対する質問が中心になる。対面の授業ではホワイトボードを用いるので、教員の講義内容が詳細になり、質問も気軽にできるので、その後の議論も深まるため、対面の方が圧倒的に良いと思う。
- ・対面の授業とオンラインの授業が連続している状況が週に 2 回あり、移動時間との兼ね合いでオンラインの方に参加できないことがあった(自習室が開いていない時間の授業など)。また、双方向のための自習室は人が同室に居て違う授業を受けているとお互いの声が迷惑になると感じた。
- ・精神的に負担が大きかった。

- ・発言する度、どアップになるせいか、発言しない人が多く、議論が活発にならなかった。
 - ・講義時間が短くなったものもあった。
 - ・実際に顔を合わせていないので、リアリティに欠けた。
 - ・日中は勤務しているため、受講場所に困ることがあった。オンデマンド主体と思って履修した科目がリアルタイムの比率が高く、勤務時間を調整する必要が生じた。
 - ・画面を見続けることでの疲労が予想以上に大きいように感じ、長時間の延長のある授業は疲労感が大きかった。
 - ・講読授業は翻訳作業の進捗率が良かったものの、同時に話をし難いために、通常ならば無駄と思える話から貴重な周辺知識を得られたが、聞くことができなかったと感じる。
 - ・実際に史料に触れる機会が少なくなった。
 - ・先生や先輩や友人と会う機会がなかったので、研究、勉強、学校生活などの悩みを相談しづらかった。
 - ・もともと少し無理のある履修計画だったのですが、オンライン授業でオンデマンド資料と課題が膨大なものになってしまい、毎日夜遅くまでそれらをこなしていたら体調を崩して単位が取れなかった授業がありました。
 - ・他の学生との接点が失われた。
 - ・講義時間の前後の休み時間等で教員・学生間や学生同士で共有される情報が重要であったことに気付かされた。
 - ・画面に映る範囲で部屋の模様替えをしなければならなかった。
 - ・授業前後に歓談・相談がしづらい。
 - ・受講者同士で授業間の雑談がなく、精神的にリフレッシュする時間がなかった。
 - ・授業時間のマネジメントができないのはいかなものか。
 - ・教員や受講生の声が聞き取りづらかった。
- ・何も問題ありませんでした。

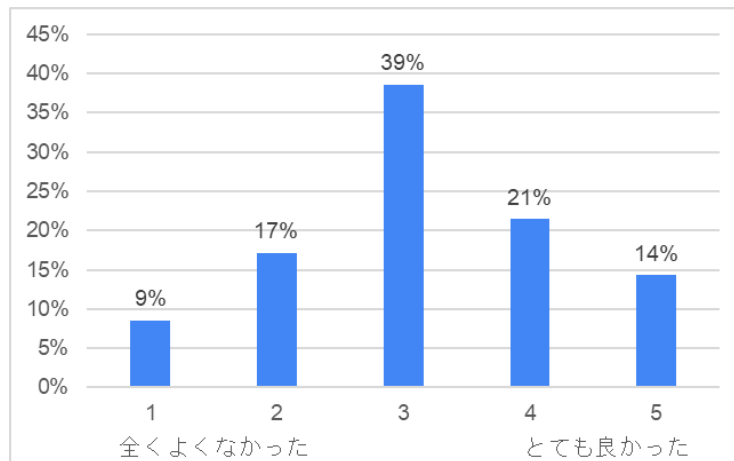
6 リアルタイム（双方向）のオンライン授業の総合的評価(n=101)

リアルタイムのオンライン授業の総合的評価は4が全体の38%、5の評価も19%で、かなり高い評価となっている。良くないという評価1，2は併せて16%しかなかった。



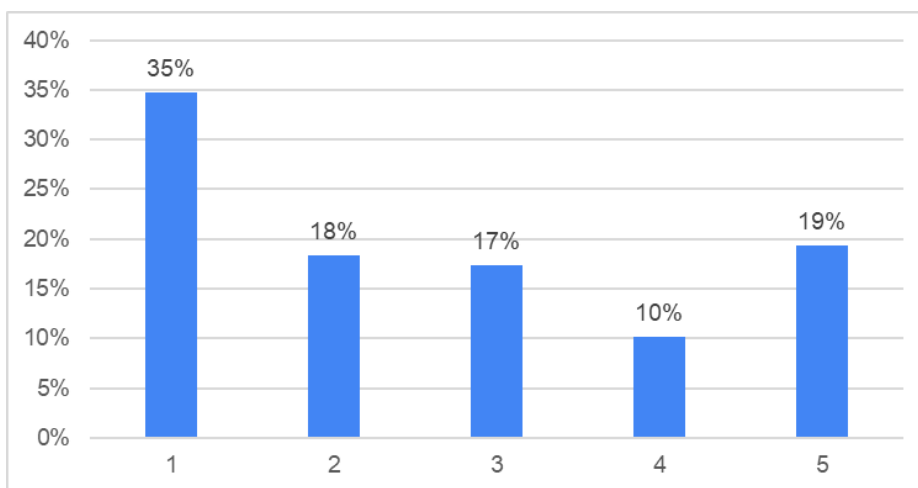
7 オンデマンドのオンライン授業の総合的評価 (n=70)

オンデマンドのオンライン授業の総合的評価は回答数が減っている。評価3が39%を占め最も多く、高い評価(4, 5)も合わせれば35%となり、平均的な評価といえる。



8 対面授業とリアルタイム(双方向)のオンライン授業、どちらの方が授業形態として良いと思いますか (n=98)

対面授業とオンラインのリアルタイムの授業のどちらが良いかという、回答しにくい質問だったが、対面授業の方がいいが35%で最も多かったが、リアルタイムオンライン授業の方がいいという学生も19%いるということは、リアルタイムオンライン授業への評価はかなり高いと考えられる。

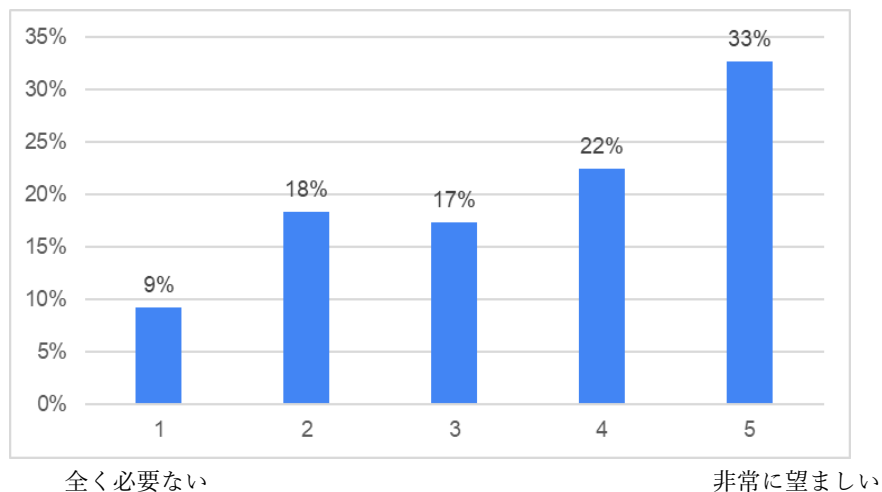


対面授業の方が良い

リアルタイムオンライン授業の方が良い

9 今後もリアルタイム(双方向)のオンライン授業を実施してほしいか (n=98)

今後もリアルタイムオンライン授業を実施してほしいかについては、非常に望ましいで5という評価をしている学生が33%で最も多く、評価4以上が55%となっており、今後もこの授業形態への要望がかなり高いといえる。必要ないとする学生は27%となっている。

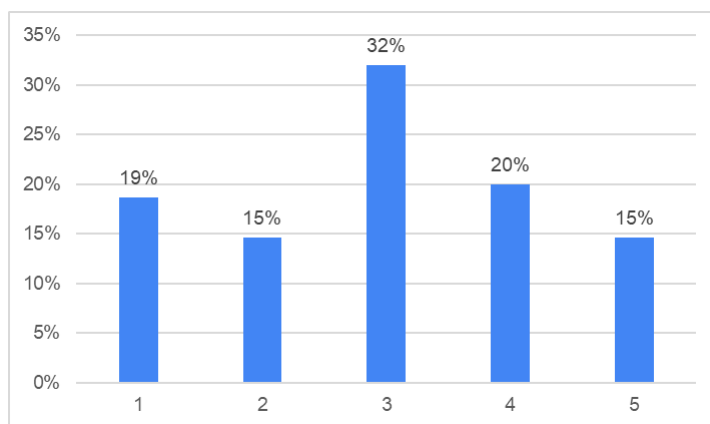


全く必要ない

非常に望ましい

10 今後もオンデマンドのオンライン授業を授業形態の一つとして実施してほしいと思うか (n=75)

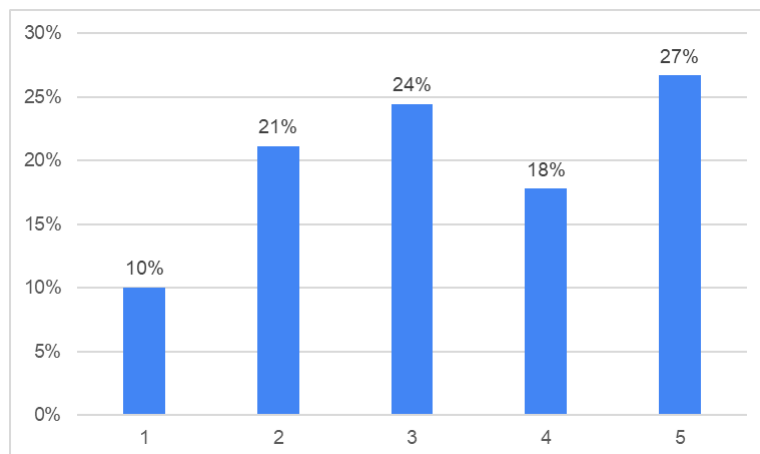
今後のオンデマンドの授業の実施については、総合評価と同じく 3 という評価が最も多くなっており、オンラインリアル授業と比べると、今後への期待は高くも低くもないといえる。



全く必要ない

非常に望ましい

11 今後、対面授業とオンライン授業（リアルタイム、オンデマンド）を併用する授業形態をどの程度実施してほしいと思うか (n=90)



全く必要ない

非常に望ましい

今後の併用の授業形態に関しては、非常に望ましい5評価が27%と最も多いという意味では、オンデマンド授業よりは要望が高いが、オンラインリアル授業への期待ほどではないといえる。

12 オンライン授業について自由記載 36件

- ・オンライン授業にも問題点が様々あると思いますが、やはり感染予防の面から言えば安心して授業を受けられるので、コロナ禍がつづく状況下においてはオンライン授業の継続が望ましいのではないかと思います。
- ・オンデマンドは体験していないので分かりません。
- ・今後も全てオンラインにしてよいと思いました。
- ・自宅のWifi接続状況により、家族に場所をゆずってもらうのが毎回少し気持ちの負担になる。
- ・功罪あり。大学院の授業は基本的に向かないのかもというのが所感です。
- ・リアルタイムとオンデマンドを併用する授業形態の場合、少なくとも授業がある日の3日前には、どちらの形式で授業を行う予定なのかあらかじめ伝えてほしい。
- ・諸事情により首都近郊の実家から通学する学生にとって、通学時間による日々の時間的損失は大学周辺に居住している学生と比べ極めて大きい。特に本人ではどうにもできない事情によって長い通学時間を強いられている場合、課題遂行のためや研究のために確保できる時間に開きが生じてしまうのは問題だと感じていた。オンライン授業によってその問題が解決したことは、私自身非常に喜ばしく感じている。ぜひともこのままオンライン授業の体制を続けていただきたい。
- ・やはり向いている科目・内容があると思われる。さらに、春に基礎的、秋に発展的なカリキュラム構成の場合は、春の方はオンライン又はオンデマンド又はそのミックス（要は対面以外）に寄せるというバランスでも悪くはないと考える。ただしこの場合、新入生が繋がりにくい。新入生同士でもそうであるし、新入生と先輩の間も同様。
- ・コロナ禍のもとでは、欠点が数々あってもオンラインは致し方ないと思う。
- ・担当教員によって機材やソフトウェアの熟練度、オンライン授業への意欲ともにばらつきがあるため、科目や専攻によって負担感が大きく異なる…ということを学部生から聞きました。オンデマンドで提供するコンテンツのテンプレート等、受講者・教員がオンラインで授業を進めていくための基準となるものが公開されると良いのではないかと思います。
- ・オンデマンドの授業は対面の授業よりも予習復習の時間があり、また、keio.jpやログブックの掲示板を通じた議論は、対面授業の限られた時間で行う議論よりも自分の見識を深められたと思う。他方で、リアルタイムの授業は相手の顔が見えないことも多く、議論には不向きだった。また、対面とリアルタイムの併用は、時間割的に参加が難しいことがあるのでやめてほしい。
- ・授業者・受講者ともに、自分の判断で対面・非対面を回ごとに選択できるようであってほしい。
- ・オンラインのリアルタイム授業と対面授業が同じ日にあると、色々と難しい点があった。自宅で受けていたオンライン授業が延長されて、夕方の対面授業に間に合わない時があった。オンライン授業において、終了時間がはっきりしないのは難点だったと思う。
- ・基本は対面で良いですが、別の用事などが入ってキャンパスに行くことができない場合にオンライン併用は有効と思いました。都合が多少悪くなくても授業に参加できたのはとても助かりました。

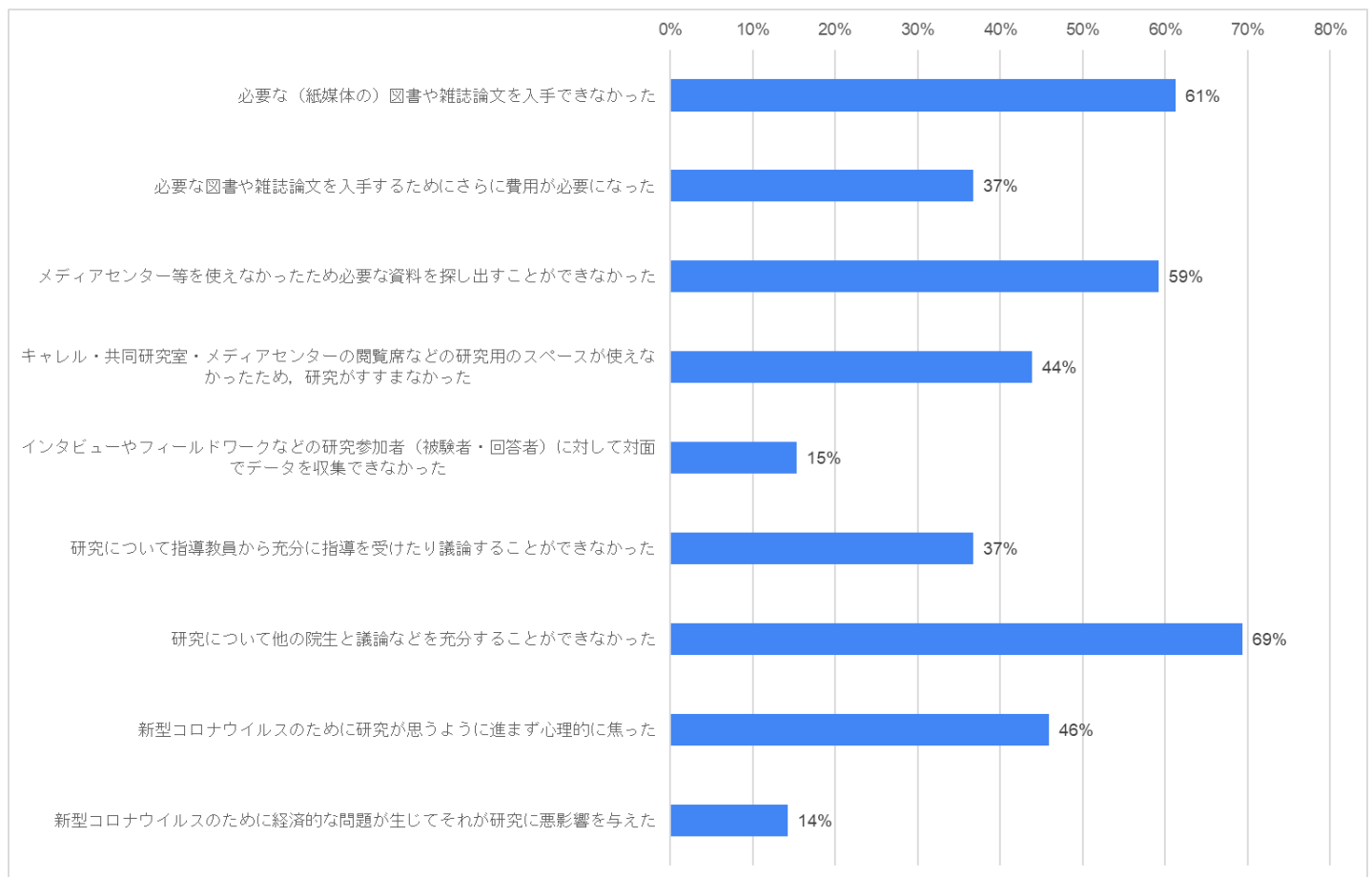
- ・教授や同期と直接大学で話す機会が無かったことが辛かった。今までなら授業の後に教室で聞けることも毎回メールでアポイントを取るなど、オンライン上で顔を合わせてはいるものの、画面を見ている以上、事実上目が合うことは無いため、教授とのコミュニケーションに物理的な距離を感じ、精神的にもきつかった。教員によっては、オンライン推奨も居ると思うが、ゼミや大学院など教員と学生の関係性が重要となる環境では、オンラインは辞めて欲しいと思いました。
- ・特に留学生にとっては、東京を離れていても受講が可能になり、今後現地入りしないまま就学ができる環境が常設されれば、より多くの学生、またより多様なバックグラウンドの学生が勉学できるようになり、大学の発展に望ましいと考える。
- ・音声も映像もなく、word に課題だけ記載されている講義が9割だったため、少し物足りなかった。そのため今後は、対面授業が難しい場合、リアルタイム型授業を行ってもらいたい。
- ・オンライン授業は、精神的な苦痛を感じやすく、学びの効率下がる。リアルタイムなら90分受けられる授業も、オンラインでは集中力が続かず、疲れやすいので、30分が限度である。パソコンが苦手な生徒がいることへの配慮が必要である。
- ・自宅や●●共同研究室でオンライン双方向授業を受けたときはまだオンライン形式でも良かったのですが、大学院校舎等に設置されていたオンライン講義用の部屋は電波状況が不安定過ぎてまったく使い物にならないと感じました。
- ・通学のため都内にアパートを借りている身としては、オンライン授業がほとんどならばアパートを解約して実家で生活することを検討したいので、今後の授業形態がオンラインなのか対面なのかが早めに分かれると有難い。
- ・大学の教室からのオンライン授業では、発言者の声が聞こえにくく、途切れるなど問題がありました。環境改善の余地があると思われます。
- ・リアルタイム形式では、1人が話し、他の参加者が聞くという状態になってしまうため、議論や質問がしにくかったです。また、画面越しに意図が伝わりづらく、先生がどこを指しているのか分からないときがありました。
- ・対面・オンラインどちらでも参加可の授業の場合、機材の運搬や準備・片付けに教員の方々が苦労されている印象でした。
- ・従前から放送大学やMOOCsなども活用していたので、特に違和感はなかった。対面でしかできないとされてきたゼミなどをオンライン化する際にはまだ問題があるが、これから技術的、組織的に試行錯誤していくほうが良いだろう。
- ・社会人学生にとってオンライン授業は好ましいものであるという予想があったが、実際には制約を強く感じた。対面授業で発生するインフォーマルなコミュニケーションの価値を知ることになった。一方、時間や場所の制約を超えて授業を受けられたことは得たものも多かったが、受けられてしまうことが結果として負担増になることは想定していなかった。
- ・オンデマンドが、通常の授業のひとコマまるまるの代替物として採用されると物足りないが、授業の補助として活用されるなら、とてもいいと思う。実際に、そういう活用のされかたをする先生もいらっしまった。とくにテクニカルな内容の授業では、ビデオで復習できる意義が大きいと思う。
- ・一時的な手段としての必要性は肯定するが、議論が中心となる修士課程以降の授業とは相性が極めて悪いように感じる。
- ・人数の少ない授業が中心である大学院は、対面とオンライン併用をフレキシブルに利用可能だと思う。あくまでもサブとして、併用によりオンラインをセイフティネットにするこ

とで授業を担保できる。

- ・移動時間が短縮されるため、研究や勉強に時間を費やせる。
- ・人と人との直接的な接触がない授業では、情報のやり取りはできても、人格同士の知的な交流は不十分になる。情報を得るだけなら、書物等を読むことで足りる。知的な交流がないと人間的な成長は望めない。大学教育とは人間的な成長をも目指すものであると思うので、オンライン授業中心のままであれば大学教育は衰退するしかないと考える。
- ・オンライン授業は素晴らしい形態であり、今後、このような形態で学習が行われるようになるに違いないと思うが、私には合わなかった。
- ・感染状況や通学時間を考えるとオンライン授業のメリットは大きいと思いますが、対面よりも発言が難しく、通信状況に左右されることも多かったので、来年度どのような授業形態が望ましいのか、個人的には大変悩ましいです。
- ・オンラインになっても授業の「質」が下がるとは、全く思わない。それよりも人と触れ合う機会が少なくなり、一人暮らしであることもあいまって精神的な辛さが大きかった。結果として勉強にもイマイチ身が入らない年度だったと思う。
- ・時間の概念をもって講義することを求める。
- ・コロナ禍の中では仕方のないことだと受け止めています。
- ・少人数での大学院のオンライン講義は、教授とのコミュニケーションも取りやすいうえ、通学時間を全て勉強・研究に使えるため非常に助かりました。

【研究に関すること】

13 修士論文や博士論文に関わる研究で困った点 (n=98)



研究で困った点は、他の院生との議論ができなかったが69%で最も多かったが、必要な図書や雑誌論文が入手できなかったが61%、メディアセンターで資料を探せなかったが59%と、メディアセンターが閉館したことの影響も大きかったことがうかがえる。

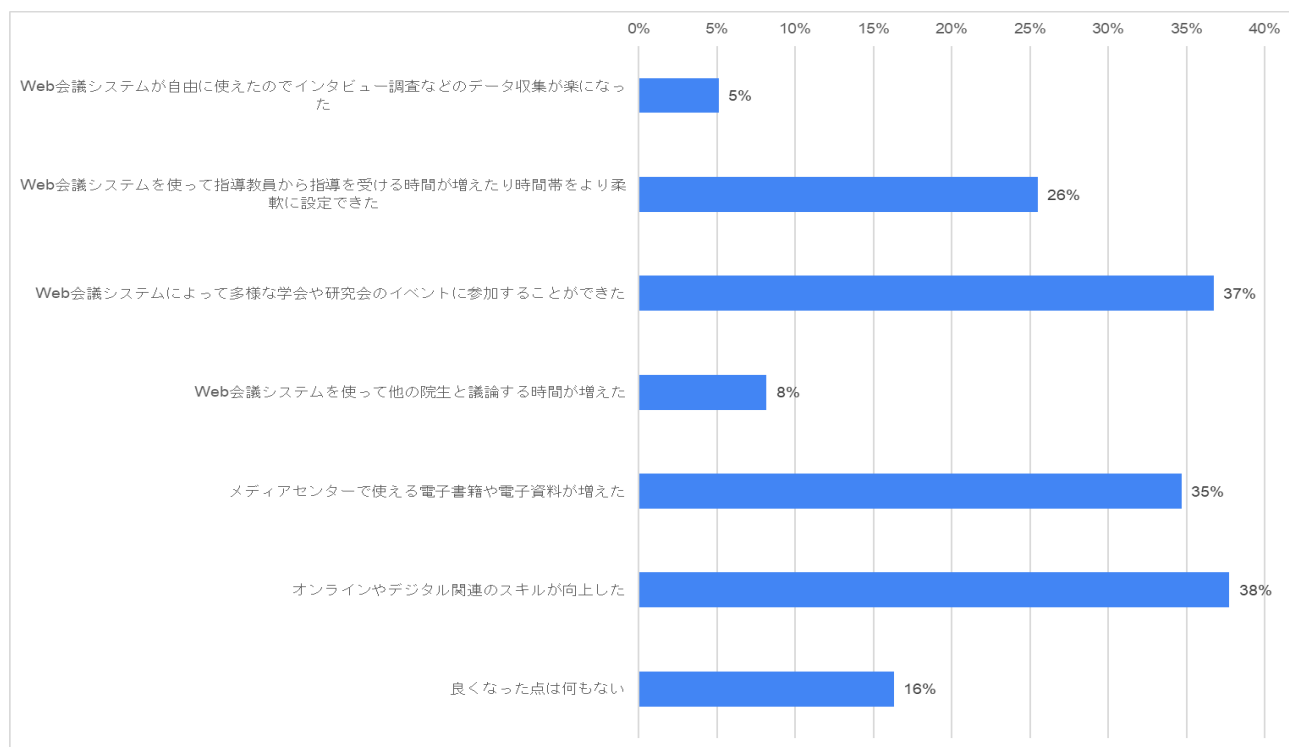
[自由記述 25 件]

- ・当初、図書館が2ヶ月以上にわたって完全閉鎖されたのは、研究にとってかなり思わしくない影響がありました。
- ・指導教授がメールを見ない人なので、授業の延長上雑談する時間が、修論の相談などにはとても必要だった。
- ・本来キャレルのロッカーなどで一部保管しておけるはずであった大量の図書を、すべて(40冊以上)家に持ち帰り自室で保管しなければならなくなったため、持ち帰ったり保管場所を確保したりするために労力を費やした。
- ・新型コロナ直接の被害というより、それを巡る情勢があまりにも流動的であったことが、リズムや集中を乱された。
- ・図書館に行けないことが本当にストレスだった。他方で、仮に行けたとしても学校の施設はほとんど使えず、必要なことではあるが図書館で資料を探すことだけのために時間をかけてキャンパスに赴くことも、無駄に感じてしまった。
- ・難しいとは思いますが、図書館はできる限り利用できるようにしてほしい。
- ・海外調査が不可能だったことが最大の問題でした。
- ・研究は孤独である所が、コロナの影響でより一層孤独に感じて精神的に比喩している人が周りに多かった。情報共有も、しにくかった。
- ・ゼミがなかったので、他の生徒と意見交換をする機会がなかった。
- ・呼吸器疾患があるので、外出が億劫になりました。そのため、図書館が延滞金の免除や、郵送による返却受付を実施してくれたのは非常に助かりました。一方、新たな資料の貸出には登校しなくてはならないのが、些か不便に感じました。技術的問題もあるかもしれませんが、郵送による貸出等にも取り組んでもらえるとありがたいです。あるいは、オンラインアクセスできる資料の範囲を拡大していただければ、研究環境の大幅な改善が期待できます。また、ソーシャルディスタンスの確保や初対面回避の推奨等によって、未知の院生同士が知り合うことが、格段に困難になっています。そこで、大学側が院生のオンラインコミュニティを設立していただけると、ある程度状況も変わるのではないかと思います。keio.jp のアカウント等に紐付けた大学内のクローズドなシステムであれば、既存の半パブリックなプラットフォームに比して、高い信頼性を確保できるのではないのでしょうか。コロナ禍の大学生活において失われたものに、カジュアルな情報交換の場や、人同士の交流の場が挙げられます。こうした場は、研究活動においても重要だと考えられます。大学として、こうした問題にも対処されることを強く望みます。
- ・先生や仲間との会話がなくなったことで、十分なサポートが得られず、研究遂行に支障が出た。
- ・授業がオンライン形式だったとしても、研究に必要な資料を借りるために結局図書館に行かないといけない。
- ・11月までキャレルが使えなかったので自分の研究スペースが取れず、進度に影響がありました。使えるようになった後も換気などで部屋の温度調節が難しく、快適な環境ではありません。
- ・研究費に関する手続き(学術研究支援)が紙ベースの手続きで不都合が多かった。

- ・今年度はメディアセンターの開館日や開館時間がかなり縮小されたため、また、昨年度まで他研究科も利用できた南館の法務研究科の自習室の利用ができなかったため、安心して利用できる研究用のスペースを学校外で探すことに時間を費やさねばならず、それはとても苦痛でした。
- ・もともと社会人学生として入学したため、資料の入手可能性の観点で、研究を始めた当初から、Web 上のデータを利用することで資料の入手可能性を担保する戦略をとっていた。また、分析やデータベースなどの基盤も自前で用意していた。それによっておそらくほとんどの研究上の問題はなかったが、研究そのものが難しい。
- ・多くの論文はオンラインで入手可能だったが、一部の雑誌、特に学術誌でない業界誌を参照するためにはメディアセンターを訪れる必要があり、閉館期間は非常に困った。また、図書館の書架から得られる偶然の発見の機会が失われたことも研究に隠然とした影響を与えたように思う。
- ・研究用のスペースが使えなかったことは研究遂行に影響を及ぼした。使用が緩和された秋学期もスペースの使用の制約があったり、利用時間・条件が不明瞭だったりと不便を感じた。自習スペースの利用時間・条件がウェブ上では分かりづらいことも多く、もっと明瞭に告知をしてほしかった。
- ・学会等のイベントがオンラインになったことで、発表の機会は増えたがインフォーマルなコミュニケーションの機会は激減し、人的ネットワークを広げることができず、研究に影響を及ぼした。
- ・メディアセンターの立ち入りが短時間しかできないのが大変だった。図書館から借りられない資料を中心に研究していたので、コピー代がとてめにかかった。論文の製本にも数万円かかっているので、経済的な負担が大きかった。
- ・形式上・外形的なことで、戸惑うことが多かった。これらについては従来、上級生からのインフォーマルな情報伝達によって疑問が解消されてきたりしたのだろうけれど、上級生・同級生とのコミュニケーションが当初ほとんどなかったのが、暗中模索という感じだった。ホームルームというと中高生のようなが、なにかそういう、特段目的を決めずに院生が集える場（オンラインのトークルームなど）が、コロナ禍の初期のころにあるとよかった。
- ・本来ならば海外現地調査が必須であるが、この1年は国内で可能な史料文献の研究のみ行った。
- ・冬だけで良いので、日曜日でもメディアを開けて欲しい。毎年、卒論修論を提出する時期の前後は、日曜も空いていたのに、今年はコロナの影響からか閉まっていた。
- ・共同研究室が使えないのは少し困りました。また、学術雑誌の運営においても支障が生じているため、正当な理由のある院生に対しては学校施設の利用を融通してもらえると助かります。
- ・キャレルに置いた荷物の回収許可が出なかったのが大変だった。
- ・哲学・文学の勉強をしていますが、図書館の郵送貸し出しもしていただけたため、困ることはありませんでした。今後もコロナウイルスなどの影響でキャンパスの立ち入りが制限されるような場合は、このようなサービスを継続していただけると嬉しいです。

14 研究を進めるにあたってより良くなったと感じた点 (n=98)

研究を進めるにあたって、この環境で逆に良くなった点に関しては、回答数が全体に減少していた。オンラインやデジタル関連スキルの向上が 38%、学会や研究会への参加が 37%、メディアセンターで使える電子資料が増えたが 35%と上位となった。



〔自由記述 16 件〕 良くなった点ではなく問題点の記載となっているものもある。

- ・コロナ禍前は、沖縄や京都、北海道の現地で開催される学習会に参加したくてもなかなかできなくて悔しかったのですが、コロナ禍で多くの学習会がZoom開催になりに参加できたことはとても良い変化でした。
- ・メディアセンターの延滞料金制度が停止されたことにはとても助かった。これを期に廃止してほしい。
- ・元々当初考えていた研究テーマから、このコロナ禍でも進められるテーマに切り替えた方も多いと推察する。
- ・先にも回答した通り、リアルタイムオンラインと対面が併用された場合にキャンパスで双方向の授業を受ける機会が増える。授業数によってはキャンパスの滞在時間が増え、キャンパスで食事をする必要がでてくるが、学食は限られた時間しかやっておらず、しかも限られた人数で運営されているので時間がかかる。にもかかわらず、キャンパス内の室内は飲食厳禁となっており、結局授業を全て終えるまで食事が取れないことも多かった。リアルタイムと対面を続けるなら(オンデマンドは別)もう少し環境を整えてほしい。
- ・研究に使える時間だけは増えた。
- ・web 会議システムにより、多様な学会や研究会のイベントに参加する事ができるのであれば、その情報を入手しやすくしていただけると、有難いです。
- ・web 会議システムの存在を知らなかった。講義でも利用したことはない。
- ・教員・他ゼミ生との関係、議論の広がりなど、研究にとって対面授業が最も良い形態であることは間違いないと思います。ただし、教員・学生双方（家族を含めて）の健康や命が危険にさらされている状況が続く限りにおいて、オンライン授業は選択肢に残していただきたいと思います。学生から教員に強く要望することは難しい場合もあると思います。大学・教員から学生に自由な選択を委ねるような仕組み作りをお願いしたいと思います。
- ・学会やシンポジウムが中止になり、教授や他の院生との交流がほとんどなく、目標とする

先輩研究者と出会えなかったため、精神的に辛い時期がありました。議論や情報交換は研究にかなりの影響があると思うので、感染対策をした上での交流会などがあればよいと思いました。

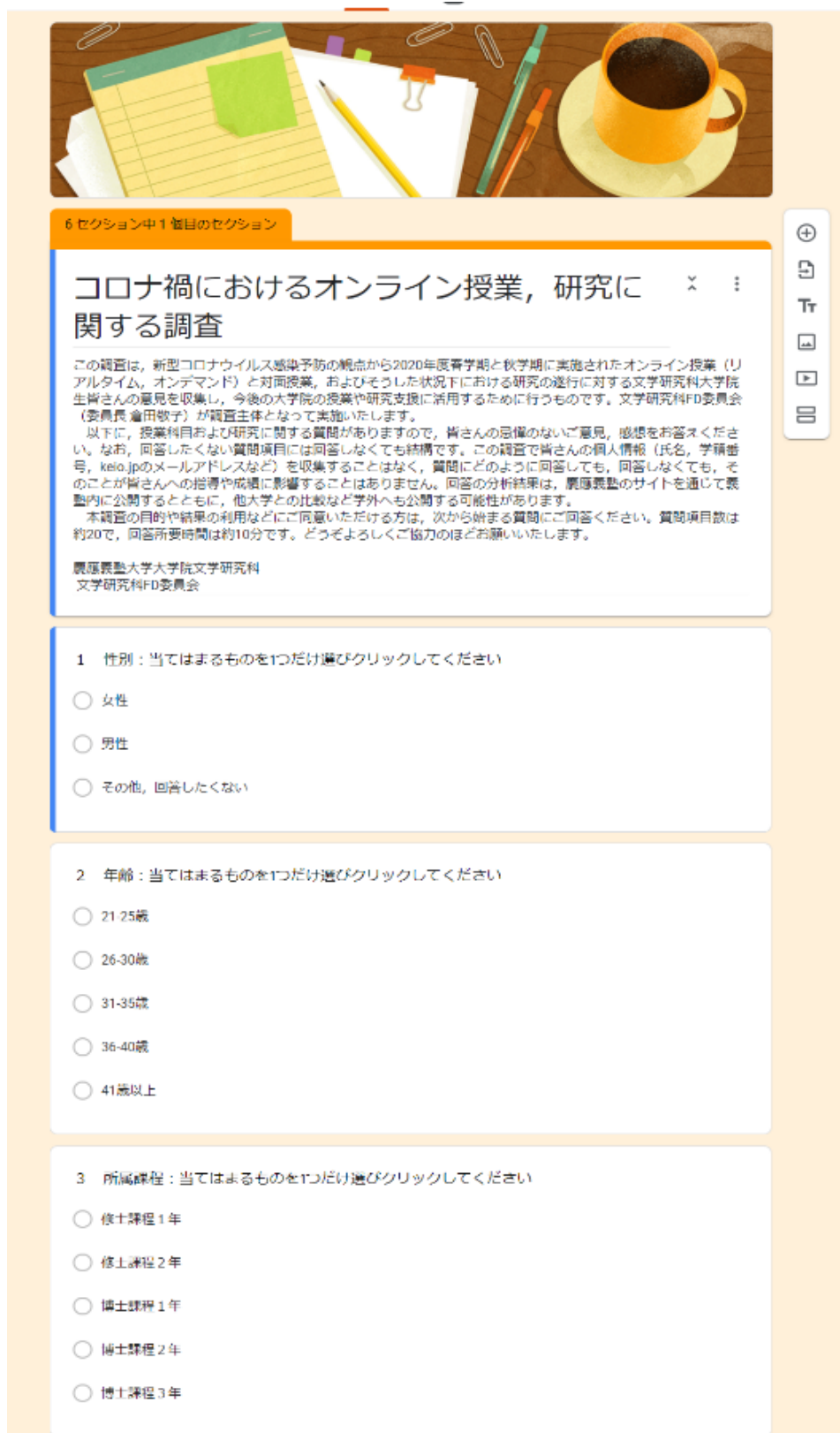
- ・昨年末、オンライン研究会によって一気に議論が進んだ領域がある。そのポテンシャルを活用できるかは今後の研究者間のコラボレーションに影響するだろう。
- ・先述したように、学会等のイベントへの参加機会自体は増えたが、コミュニケーションは制約されたので得られた体験の質については疑問が残る。
- ・電子書籍の購入リクエストをいくつも受け付けて下さり非常に助かった。また、他大学への訪問はできなくなったが、資料取り寄せ費用の補助が非常に役立った。4月頃は文献を入手できないかもしれないという不安がありましたが、それ以降は山中資料室からも迅速に資料を取り寄せて下さり非常に感謝しています。
- ・家の経済状況が悪化したため、休学を考えることもありました。奨学金でなんとか持ちこたえている状態です。今後、新型コロナウイルスは鎮静化に向っていくと予想されますが、経済状況はなかなか改善しないように思います。学生に対する経済支援を願います。
- ・私は指導教員から精神的なケア、そして熱心に指導していただいたので、ストレスが比較的少なかったですが、日頃から指導教員とのコミュニケーション不足であった院生は厳しい状況であったと思う。さらに、研究の分野、手法によっての格差もより顕著になり、院生内格差が心苦しかった。
- ・メディアセンターが今年度から複写資料の取り寄せ費用を一部負担してくれることになり、それが資料の収集に非常に役立った。
- ・Web学会は自宅から参加できるため、前日に突然教授から会議の紹介をいただいた場合も参加することができました。学会は対面の方が良いかもしれませんが、オンライン参加も選択肢として用意されているものが増えると良いと思います。

15 調査全体に対する自由記述 10 件

- ・ありがとうございました。
- ・オンライン授業についてだけではなく、他のこともアンケートがあれば、フィードバックできるかと思いました。
- ・今年入学される方には、オンラインで構わないのでなるべく手厚く（従来より手厚く）各種ガイダンスを実施されるのが良いのではないかと。それは必ずしも教員だけでやられる必要はなく、専攻科の先輩学生が主催するなどのやり口もあると思われる。
- ・可能であれば、二次分析が行えるよう回答データをオープンデータにしてほしいです。
- ・せっかくの調査、この一年の学生の経験を活用して来年につなげてほしい。
- ・最初の質問の「授業全体への出席率」という項目が、何を聞いているのかよくわからなかった。
- ・なるべくこれまでの環境に戻す方針でいていただけると嬉しいです。指導教授や教員と、画面上でしか会話がかなわない環境は辛かったです。
- ・客観的な意見を伝えることができる貴重な機会だと思います。
- ・学生・院生のメンタル面に関する調査もあればいいなと思いました。1人暮らしの学生の場合はコミュニケーションの機会が減ってしまい、心理的ストレスが増えたのではないかと思います。
- ・おそらく研究に対するコロナの影響は、メディア・通信技術の活用だけで語れるものではないように思える。研究というものに対するスタンス(時間的・空間的)が変わってきた印

象がある。

[付録] 質問紙調査の画面



6 セクション中 1 個目のセクション

コロナ禍におけるオンライン授業，研究に関する調査

この調査は，新型コロナウイルス感染予防の観点から2020年度春学期と秋学期に実施されたオンライン授業（リアルタイム，オンデマンド）と対面授業，およびそうした状況下における研究の遂行に対する文学研究科大学院生皆さんの意見を収集し，今後の大学院の授業や研究支援に活用するために行うものです。文学研究科FD委員会（委員長 倉田敬子）が調査主体となって実施いたします。

以下に，授業科目および研究に関する質問がありますので，皆さんの思惟のないご意見，感想をお答えください。なお，回答したくない質問項目には回答しなくても結構です。この調査で皆さんの個人情報（氏名，学籍番号，keio.jpのメールアドレスなど）を収集することはない，質問にどのように回答しても，回答しなくても，そのことが皆さんへの指導や成績に影響することはありません。回答の分析結果は，慶應義塾のサイトを通じて教壇内に公開するとともに，他大学との比較など学外へも公開する可能性があります。

本調査の目的や結果の利用などにご同意いただける方は，次から始まる質問にご回答ください。質問項目数は約20で，回答所要時間は約10分です。どうぞよろしくご協力のほどお願いいたします。

慶應義塾大学大学院文学研究科
文学研究科FD委員会

1 性別：当てはまるものを1つだけ選びクリックしてください

☐ 女性

☐ 男性

☐ その他，回答したくない

2 年齢：当てはまるものを1つだけ選びクリックしてください

☐ 21-25歳

☐ 26-30歳

☐ 31-35歳

☐ 36-40歳

☐ 41歳以上

3 所属課程：当てはまるものを1つだけ選びクリックしてください

☐ 修士課程1年

☐ 修士課程2年

☐ 博士課程1年

☐ 博士課程2年

☐ 博士課程3年